

昭和56年度 厚生省神経疾患研究委託費

筋ジストロフィー症の療護に関する総合的研究
研究成果報告書

昭和57年3月

班長 国立療養所東埼玉病院 井上 満

目 次

序	国立療養所東埼玉病院 班長 井上 満	1
心理障害生活指導の研究のまとめ		2
	国立療養所八雲病院 篠田 実	
感覚統合に関する研究 (PMD児の聴性脳幹反応)		3
	国立療養所下志津病院 山形 恵子・松下 登	
PMD児の感覚統合に関する研究 (回転後眼振検査)		5
	国立療養所下志津病院 山形 恵子・松下 登	
Duchenne型筋ジストロフィー者の知覚—運動協応		8
	国立療養所鈴鹿病院 深津 要・中藤 淳・野尻久雄 宮崎 光弘・陸 重雄・小笠原 昭彦	
DMD児の視知覚発達特性について		12
	国立療養所南九州病院 乗松 克政・西村 喜文・中島 洋明	
PMD・Duchenne型の知能に関する研究 —乱数生成法による検討—		16
	国立療養所八雲病院 篠田 実・三好 力	
DMD患者の知能障害の分析 —同胞間のIQの類似性の検討—		19
	国立療養所鈴鹿病院 深津 要・小笠原 昭彦・野尻久雄 宮崎 光弘・中藤 淳・陸 重雄	
CMD患児の知能の縦断的研究		21
	国立療養所松江病院 中島 敏夫・黒田 憲二	
筋ジストロフィー症児の言語能力についての研究		25
	国立療養所西別府病院 三吉野 産治・吉良 陽子・藤原 郁子	
箱庭遊戯による患児の無意識世界の考察		29
	国立療養所兵庫中央病院 笹瀬 博次・中西 孝	
筋ジス患者における病識の変容と生活態度の研究		33
	国立療養所長良病院 古田 富久・飯村 妙子・坂口 えみ子 森田 エイ子	
Duchenne型筋ジストロフィー患者の時間的展望		43
	国立療養所鈴鹿病院 深津 要・小笠原 昭彦・野尻久雄 宮崎 光弘・陸 重雄・中藤 淳	
	名古屋工業大学 甲村 和三	

Duchenne型PMD者の時間評価 —自我関与の影響について—	47
国立療養所鈴鹿病院	深津 要 ・ 野尻 久雄 ・ 宮崎 光弘
	小笠原 昭彦 ・ 中藤 淳 ・ 陸 重雄
名古屋工業大学	甲村 和三
成人患者の社会性の検討.....	52
国立療養所川棚病院	中沢 良夫 ・ 中野 俊彦 ・ 井上 幸平
PMD者の社会性発達とその近接領域の調査研究.....	53
国立療養所兵庫中央病院	笹瀬 博次 ・ 荒井 道子 ・ 小西 史子
	龍見 代志美
PMD児(者)の社会参加へのアプローチ (入院児(者)中心)	58
国立療養所下志津病院	山形 恵子 ・ 関谷 智子 ・ 杉山 浩志
筋ジストロフィー症病棟成人患者の生活実態及び意識調査からの一考察.....	62
国立療養所岩木病院	木村 要 ・ 工藤 重幸 ・ 佐藤 勇
成人患者の生活の検討 (共同研究)	65
国立療養所川棚病院	中沢 良夫 ・ 堀田 五月 ・ 平尾 智由子
	カ石 富子
卒後指導と生きがいに着目した学令期DMP児の余暇利用の対策.....	69
国立療養所原病院	升田 慶三 ・ 松永 萬里 ・ 西岡 正人
	吉岡 恭一
筋ジストロフィー症低IQ成人患者の余暇指導.....	71
国立赤坂療養所	岩下 宏 ・ 江口 喜久子 ・ 小田 愉香
本院から授産施設へ移行入所させた患者の追跡調査.....	73
国立療養所刀根山病院	伊藤 文雄 ・ 白神 潔
社会復帰した筋ジストロフィー症患者の生活向上と生きがい.....	76
国立赤坂療養所	岩下 宏 ・ 中嶋 健爾 ・ 渡辺 亨
筋ジス患者 (L-G型) の社会復帰について.....	78
国立療養所松江病院	中島 敏夫 ・ 黒田 憲二 ・ 鈴木 一男
国立療養所(病院)のPMD児(者)に対する今後の役割りとそのあり方についての研究(1)	83
国立療養所西多賀病院	佐藤 元 ・ 浅倉 次男
小田原地区における在宅筋ジス者ディケアのニードについて.....	87
国立療養所箱根病院	村上 慶郎 ・ 森田 庸子
DMP患児(者)の性に関して —DMP青年期患児者の性意識について—	90
国立療養所宇多野病院	森吉 猛 ・ 磯本 峰億 ・ 鞠山 紀子

“バウム・テスト”を取り入れての生活指導 —1 ケースの追跡報告—	94
国立新潟療養所	高 沢 直 之 ・ 檜 出 直 木 ・ 布 施 正 俊 青 山 良 子
先天性筋ジストロフィー症の言語理解の指導	97
国立療養所八雲病院	篠 田 実 ・ 高 子 秀 代 ・ 上 野 幾 子 出 町 友 子 ・ 笹 田 秀 子 ・ 加 藤 キクミ
先天性筋ジストロフィー症児の保育を試みて	100
国立療養所川棚病院	中 沢 良 夫 ・ 堀 田 五 月 ・ 力 石 富 子 平 尾 智 由 子
先天性筋ジストロフィー症児の療育	102
国立療養所沖縄病院	大 城 盛 夫 ・ 吉 浜 尚 美 ・ 松 田 江 利 子 山 城 葉 子
CMD児の生活能力評価基準表の作成	103
国立療養所徳島病院	松 家 豊 ・ 川 合 恒 雄 ・ 中 西 誠 早 田 正 則 ・ 久 次 米 愛 子
遊びの研究 (第2報)	107
国立療養所東埼玉病院	井 上 満 ・ 松 本 訓 子 ・ 川 上 範 子 吉 岡 桂 子 ・ 川 俣 美 代 子 ・ 高 橋 好 江
筋ジストロフィー症における排泄指導	112
国立療養所沖縄病院	大 城 盛 夫 ・ 真 喜 屋 実 祐
高等部卒業後の発達の遅れた子の生活指導	114
国立療養所医王病院	吉 田 克 巳 ・ 細 徑 さ と み ・ 新 田 節 子 谷 川 清 子
筋ジス病棟におけるボランティア活動の取組みについて	116
国立療養所岩木病院	木 村 要 ・ 佐 藤 勇 ・ 工 藤 重 幸
PMD児(者)の生活指導に関する事例研究 (1)	120
国立療養所西多賀病院	佐 藤 元 ・ 浅 倉 次 男 ・ 菊 池 正 彦 菅 井 武 夫 ・ 菅 原 進
機器開発の研究のまとめ	123
愛媛大学医学部整形外科	野 島 元 雄
日常生活に必要なスイッチ類の操作自助具の研究	125
国立療養所箱根病院	村 上 慶 郎 ・ 古 内 文 夫

意志伝達を計る為のナースコールを製作・試行して.....	129
国立療養所岩木病院	木村 要 ・ 黒瀧 静江 ・ 小泉 幸子 小山内 ノリ ・ 工藤 恵子 ・ 岩谷 百合子 山口 千代 ・ 川村 広子 ・ 山内 早苗 山内 ツルミ ・ 長尾 二三子 ・ 加藤 実 対馬 良子 ・ 福島 ミツエ ・ 小笠原 郁子 須藤 千恵子 ・ 山口 友子 ・ 高橋 真 工藤 重幸
Duchenne型筋ジストロフィー症患(児)者の食事用自助具について.....	132
国立療養所東埼玉病院	井上 満 ・ 風間 忠道 ・ 山川 和正 広瀬 秀行 ・ 谷中 誠 ・ 石原 伝幸
高低可変式作業台の研究開発.....	136
国立療養所刀根山病院	伊藤 文雄 ・ 白神 潔
股、膝関節矯正板の作成.....	138
国立療養所医王病院	吉田 克巳 ・ 正木 不二磨 ・ 崎田 朝保
PMDの軀幹、四肢変形に対する予防及び改善装置の開発.....	141
国立療養所西多賀病院	佐藤 元 ・ 五十嵐 俊光 ・ 伊藤 英二 間 間 勝 弥
筋ジストロフィー用BFOの開発.....	143
国立療養所徳島病院	松家 豊 ・ 森本 訓明 ・ 新田 英二 白井 陽一郎 ・ 武田 純子
徳島大学教育学部	松永 強 右
車椅子の工夫 第二報.....	146
国立療養所東埼玉病院	井上 満 ・ 高橋 愛子 ・ 加藤 きみ 前川 光子 ・ 西條 美江 ・ 成沢 由紀子 松田 ルミ子 ・ 斉藤 トミ ・ 石塚 洋子 黒須 ミツイ ・ 今井 さつき ・ 砂原 美紀子 伊藤 初恵 ・ 毛呂 一美 ・ 細矢 和子 家富 初江 ・ 多田 貴世美
PMD (D型) の体幹装具について.....	150
国立療養所岩木病院	木村 要 ・ 大竹 進 ・ 増岡 昭生 高橋 真 ・ 山田 誠治

体幹装具の工夫.....	153
国立療養所南九州病院	乗松克政・園田淳二・新屋正信 幸福圭子・樋口逸郎・中里興文 中島洋明
鹿児島大学内科学第3	中川正法
筋ジストロフィー症に対する軀幹変形矯正のためのBucket Seatについて.....	156
愛媛大学医学部整形外科	野島元雄・首藤貴・狩山憲二 伊藤俊介・楠部英郎・西本章 佐々木雅敏・恒石澄恵・赤松満
筋ジストロフィーに関連した装具の開発.....	160
国立療養所徳島病院	松家豊・森本訓明・早田正則 白井陽一郎・武田純子・奥村建明 小林計二・鈴木和恵
PMDの各種動的起立台の開発.....	163
国立療養所西多賀病院	佐藤元・根立千秋
車椅子牽引車の試作.....	165
国立療養所再春荘	安武敏明・上野和敏・境勇祐 弥山芳之・川上友哉・高月洋一 岡元宏・山永裕明
PMD児(者)の自助具の研究—無線操縦装置導入のワゴン車の開発(4)—.....	167
国立療養所西多賀病院	佐藤元・浅倉次男・大内一則 平松治
コルセット式体外陰圧人工呼吸器の開発.....	170
国立療養所徳島病院	松家豊・森本訓明・亀山和人 新田英二・白井陽一郎・武田純子 田島幸一・泉喜策
徳島大学第2外科	原田邦彦・佐尾山信夫・浜口伸正 倉山幸治
進行性筋ジストロフィー症に対する肺理学療法.....	173
国立療養所徳島病院	松家豊・武田純子・白井陽一郎
在宅神経筋疾患患者の入浴装置について.....	176
愛媛大学医学部整形外科	野島元雄・首藤貴・狩山憲二 伊藤俊介・佐々木雅敏・恒石澄恵 大塚彰・赤松満

PMD児の運動負荷運動量に関する研究.....	178
国立療養所下志津病院	山形恵子・平野隆司・井沢晴一 井岡 栄
D型PMD児のStage別ADLの推移(和式生活を中心に).....	180
国立療養所下志津病院	山形恵子・藤村則子・松下 登
PMD、Duchenne typeのADLとstageの調査研究	183
国立療養所鈴鹿病院	深津 要・野々垣嘉男・陸 重雄
筋ジストロフィー症における機能ステージの検討.....	189
愛媛大学医学部整形外科	野島元雄・首藤 貴・狩山憲二 角 典洋・伊藤俊介・櫛部英郎 佐々木雅敏・恒石澄恵・赤松 満
筋ジストロフィー症患者の筋力評価—特に微小握力の研究—	190
愛媛大学医学部	野島元雄・赤松 満・首藤 貴 大塚 彰・狩山憲二
国立西別府病院	吉田祐三
看護の研究のまとめ.....	194
国立療養所徳島病院	松家 豊
皮膚疾患の看護.....	197
国立療養所沖縄病院	大城盛夫・又吉敏子・大城夏子 島田節子・比嘉京子・山内時子 玉那覇敏子・桃原久子・山川桂子 仲間悦子
皮膚疾患の看護—陰部皮膚疾患の発症誘因の追求—	199
国立療養所原病院	升田慶三・香川満子・吉井明美 松場由佐子・中田恵子・田村栄子 明理恭子・元田希始子・谷口智子 曾我多賀子・岡田紀世子・星出充子 吉永孝子・岡田成子
筋ジストロフィー症の変形に対する看護.....	205
国立療養所徳島病院	松家 豊・川村君子・井内明江 姫田純子・神領豊子・渡辺八重子 森本節代・西條順子・福田シゲル 位頭広子・久次米愛子・横山綾子 小山玲子・白井陽一郎・武田純子

PMD患者に対する呼吸訓練効果.....	208
国立療養所西多賀病院 佐藤元・渡部昭吉・伊藤英二	
Duchenne型進行性筋ジストロフィー症患者の死亡前循環器系症状の推移.....	210
国立療養所鈴鹿病院 深津要・宇都涼子・松田りと	
心不全及び換気不全のある患者の生活指導の基準作成を試みて.....	214
国立療養所刀根山病院 伊藤文雄・小林節子・岩瀬ますみ 大森清子・松崎成子・田所和子 井上さと子	
進行性筋ジストロフィー症児の呼吸器感染症を予防する為に一院内実態調査を施行して一.....	219
国立療養所西別府病院 三吉野産治・佐々木直美・植田博子 楠本君江・中野禎子・日野真理子 佐藤典子・中島宮子・恒成徳子	
肥満に対する看護.....	222
国立療養所川棚病院 中澤良夫・西隈澄子・増田満子 坂本美砂緒・長与百合子・他スタッフ一同	
肥満に対する看護.....	225
国立療養所岩木病院 木村要・七戸千恵・須藤ミサホ 水谷栄子・石動ふゆ・西塚悦子 古川善造・三浦恵美子・村岡弘子 高橋良子・福山千代・佐藤英子 斉藤勇鎰・丸山律子・有馬文子 成田次江・高木富子・赤平栄子 安田真砂子・米沢みや子	
筋ジストロフィー症の合併症に関する研究(肥満について).....	227
国立療養所東埼玉病院 井上満・岩崎とよ・桧山とよ子 杉本友子・前川光子・大山美恵子 他16名	
肥満に対する看護「筋ジストロフィー症の肥満児における介助の検討」.....	230
国立療養所東埼玉病院 井上満・近藤美佐子・成富明子 川村利子・岡安信・杉本友子 増尾さかえ・嶋崎和恵・高橋孝子 藤波ミヤ子・渡辺節子・杉田文子 押田友子・石留喜久子・後藤洋子 田部あけみ・斉藤千恵子・渡辺志津枝	

PMD肥満患者の看護 一意識調査から一	234
国立療養所鈴鹿病院	深津 要 ・ 桜井 ヨシ子 ・ 宮崎 ヨシ子 谷口 サク
消化器合併症の看護	236
国立療養所南九州病院	乗松 克政 ・ 前山 智子 ・ 岩間 豊子 新名 まゆみ ・ 増田 みな子 ・ 鶴 リエ子 小丸 都 ・ 竹元 千代美 ・ 川崎 ひろ子 税所 修子 ・ 米満 ひとみ ・ 真淵 富士子 稲元 昭子 ・ 吉永 京子 ・ 中島 洋明
食事介助、用具用品の利用及び考案 その1	240
国立療養所宮崎東病院	林 栄治 ・ 吉野 郁子 ・ 小野 真知子 安楽 ツネ ・ 弓削 広枝 ・ 崎田 民子 原田 佳代子 ・ 藤本 久二子 ・ 関 聡子 蛭原 咸子 ・ 河田 万里子 ・ 満留 章夫 宮脇 礼子 ・ 中川 久子 ・ 磯江 アケミ 山下 理恵子
食事介助の用具、用品の工夫 その1 食台の工夫	244
国立療養所兵庫中央病院	笹瀬 博次 ・ 布野 嘉代子 ・ 西村 和子 渡辺 典子 ・ 山口 恵子 ・ 去来川 さつき 佐藤 正明 ・ 松本 孝一 ・ 寺西 哲也 惣田 勝 ・ 他筋ジス病棟一同
座位不能なCMD患児のためのリクライニング車椅子のベットの利用	247
国立療養所松江病院	中島 敏夫 ・ 井原 玲子 ・ 笠木 重人 鈴木 一男 ・ 加藤 章江 ・ 河上 静江 山田 真巳子 ・ 落合 美恵子 ・ 足立 弘子 山本 富美
筋ジストロフィー症患児者のための排泄用補助具の試作	251
国立療養所宇多野病院	森吉 猛 ・ 水本 幸次 ・ 永見 未広 山名田 泰伸 ・ 八木 敬次 ・ 磯本 峰億 佐藤 茂美
呼吸障害を伴う小児神経筋疾患における超音波換気量モニターの使用経験と応用について	253
国立武蔵療養所	猪瀬 正 ・ 富間 節子 ・ 川口 千寿子 菅野 勝江 ・ 猪 尚子 ・ 桜川 宣男 7-1病棟一同

看護記録の検討 その1	256
国立新潟療養所	高 沢 直 之
12B	渡 辺 ユキ子 ・ 渋谷 みや子 ・ 長 世 千代恵 他18名
13B	猪 俣 トク ・ 山 本 満 子 ・ 山 田 順 子 渡 辺 茂 美 ・ 他17名
看護記録の検討	259
国立療養所東埼玉病院	井 上 満 ・ 永 井 恭 子 ・ 佐 藤 美 子 松 浦 涼 子 ・ 大 塚 葉 子 ・ 相 川 保 志 真 砂 ツ ヤ
短期療育システムにおける記録の検討	262
国立療養所刀根山病院	伊 藤 文 雄 ・ 築 山 ツミ子 ・ 乗 越 正 美 松 本 明 代 ・ 北 村 美智子 ・ 野 村 千鶴子 内 出 登喜代 ・ 大 田 美知枝
看護記録の検討（ADL評価表を考える）	265
国立療養所西奈良病院	福 井 茂 ・ 酒 井 久 子
先天性PMD患児の基本的看護	267
国立療養所宇多野病院	森 吉 猛 ・ 佐 藤 茂 美 ・ 森 野 幸 子 依 田 めぐみ ・ 福 山 たつ子 ・ 鶴 田 美千代 松 村 久美子 ・ 中 西 加代子
L G型PMD患者の看護 その(1) L G型PMD患者の実状調査報告	271
国立新潟療養所	高 沢 直 之 ・ 渡 辺 キクノ ・ 内 山 ヒロ 桑 原 チヨ ・ 矢 代 澄 江 ・ 小 山 ミナ子 堀 ムツ子 ・ 片 山 幸 子 ・ 木 村 キヨ 猪 浦 よし子 ・ 武 藤 キヨ ・ 村 山 幸 智 赤 沢 節 子 ・ 安 中 由美子 ・ 小 熊 朝 子 飯 塚 秀 子 ・ 小 黒 啓 子 ・ 石 川 美佐子 氷見山 佳代子 ・ 五十嵐 由紀子
在宅看護およびデイケア看護について	274
国立赤坂療養所	岩 下 宏 ・ 平 田 朝 子 ・ 江 田 和 子 山 本 美恵子 ・ 山 下 千代香 ・ 城 戸 和 代 三 根 澄 代 ・ 江 島 恵美子 ・ 木 下 美智代
成人筋ジス患者の訪問看護	277
国立療養所箱根病院	村 上 慶 郎 ・ 谷 口 恭 子 ・ 御 嶽 延 代 小 林 広 美 ・ 松 井 澄 子

在宅看護、デイケア看護	279
国立療養所再春荘	安武敏明・米丸瑞子・増永勢津子 横枕はつみ・本田タミ子・原山久美子 中川美代子・池本勝子・戸川キミヨ 川田仁美・沢田しづ代
筋ジストロフィー症の診断確定時期における看護援助（2事例の看護経過を通しての一考察）	283
愛媛大学医学部	野島元雄
愛媛大学医学部附属病院	中村慶子
看護から見た生活援助の研究（入院6ヶ月を経たPMD児のしつけ）	287
国立療養所八雲病院	篠田実・佐藤和隼・木村博善 石川武征・樋渡敏文・岡田香代子 斉藤三男・松本恵子・久松秀則 千徳堤・佐々木和子・保原富江 湯浅柄美子・阿部一男
看護からみた生活援助の研究(Ⅱ) 一機能訓練における患児(独歩)の行動(D型)一	290
国立療養所八雲病院	篠田実・湯浅柄美子・佐々木和子 保原富子・斉藤三男・木村博善 石川武征・松本恵子・岡田香代子 樋渡敏文・千徳堤・久松秀則 佐藤和隼
看護からみた生活援助の研究 自然排便の維持をはかる為の一方法	293
国立療養所医王病院	吉田克巳・須田千代子・藤田理子 辻恵美子・中川貴代子・松本時子 谷川清子
看護基準に関する研究（看護からの生活指導）	296
国立療養所下志津病院	山形恵子・河野ユキ・安田美智子 堀口由子・津島妙子・須藤光子 佐久間宏子・池谷弘子・小山八代子 望月早枝子
ベッド用品の研究：マットレスに関して	301
国立療養所徳島病院	松家豊・中西佳江・横山綾子 久次米愛子・福田シゲル・位頭広子 佐藤道宏

ベット用品の研究 (マットレスに関して)	304
国立療養所東埼玉病院	井上 満 ・ 高橋 愛子 ・ 加藤 きみ 今井 さつき ・ 細矢 和子
PMD患者に対するムアツ敷ふとんの試用	306
国立赤坂療養所	岩下 宏 ・ 宮園 サダ子 ・ 藤原 茂子 斉藤 鈴子 ・ 田村 定義 ・ 中島 芳江 江崎 美佐子 ・ 佐々木 ルリ子
ムアツ式マット使用を試みて —ムアツ式マットとパームマットの比較—	309
国立療養所刀根山病院	伊藤 文雄 ・ 宇崎 恵美子 ・ 岩瀬 ますみ 渡辺 ミエ子 ・ 青木 加代子 ・ 植村 登美子 竹嶋 由美子 ・ 坂東 一美 ・ 仲村 紀子
看護基準に関する研究	312
国立療養所徳島病院	松家 豊 ・ 福田 シゲル
国立療養所西多賀病院	大内 礼子
国立療養所東埼玉病院	永井 恭子
国立療養所下志津病院	河野 ユキ
国立療養所刀根山病院	大田 美知枝
国立療養所南九州病院	真淵 富士子
看護からみた生活指導上の問題	314
国立療養所西多賀病院	佐藤 元 ・ 小山 勝次 ・ 千田 武昭 瀬上 よしみ ・ 川村 昭一 ・ 村上 きよみ
栄養の研究のまとめ	316
弘前大学医学部	木村 恒
ビタミンE欠乏モルモットによる筋ジストロフィー発現過程の代謝異常に関する研究	317
国立栄養研究所	山口 迪夫 ・ 平原 文子 ・ 印南 敏
ジストロフィーマウスにおける筋疾患の発現進行と栄養条件との関係	321
国立栄養研究所	山口 迪夫 ・ 真田 宏夫 ・ 宮崎 基嘉
PMD患者の無機質代謝について	325
徳島大学医学部	新山 喜昭 ・ 大中 政治 ・ 坂本 貞一 小松 啓子 ・ 岡田 和子
PMD患者の尿中遊離アミノ酸排泄	327
徳島大学医学部	新山 喜昭 ・ 大中 政治 ・ 坂本 貞一 小松 啓子 ・ 岡田 和子

PMD患者の排便量の長期観察	329
徳島大学医学部	新山喜昭・大中政治・坂本貞一 小松啓子・岡田和子
筋ジストロフィー症における栄養動態の基礎的研究(第二報)	330
愛媛大学医学部	野島元雄・澄田道博・濱田稔 奥田拓道・渡辺孟
在宅筋ジストロフィー症患者の栄養生化学的研究(第二報)	333
愛媛大学医学部	野島元雄・濱田稔・澄田道博 新開省二・一色保子・山中千代子 和田武・奥田拓道・渡辺孟
比較的年長のPMD患者の栄養摂取実態	338
国立療養所徳島病院	松家豊・新居さつき・藤原育代 野町結花
栄養改善に関する研究	341
国立療養所西別府病院	三吉野産治・城戸美津子・浅井和子 阿南深雪
筋ジストロフィー症患者給食改善の工夫—その1—	345
国立療養所松江病院	中島敏夫・鈴木裕子・笠木重人 落合克子・土井愛子・長谷川優子
進行性筋ジストロフィー症患者に対する特殊食品の使用についての研究	348
国立療養所箱根病院	村上慶郎・清水幸子・高橋和博 岡崎隆・林英人・和田正男
障害度と摂取栄養量との関係	351
国立療養所下志津病院	山形恵子・大島久夫・小倉洋子 小倉誠・田中徳子
栄養指導の効果判定について	354
国立療養所東埼玉病院	井上満
国立療養所東埼玉病院 栄養管理室	小林由美子・佐藤元一・小日向勝衛 武田ルミ子・宮坂政彦
筋ジス患者の血圧測定に関する研究—客観的表示記録法と振動法の比較—	359
弘前大学医学部	木村恒・竹森幸一・仁平将 三上聖治
筋力測定装置の開発	362
国立療養所西多賀病院	佐藤元・伊藤英二・門間勝弥

PMD患者の体力測定法とその評価.....	366
弘前大学医学部 木村恒	
八雲、岩木、西多賀、東埼玉、下志津、新潟、箱根、医王、長良、鈴鹿、宇多野、刀根山、兵庫 中央、西奈良、松江、原、徳島、川棚、再春荘、西別府、南九州、沖縄の各病院	
研究促進のための剖検、生筋検等研究協力と実態調査.....	370
日本筋ジストロフィー協会 河端二男・川口道雄・下山秀範	
橋立昇・深川四郎・城山由比	
大元剛・波多江一俊・小川秀雄	
ワークショップ「筋ジストロフィー症呼吸不全管理の実際」.....	373
議事録(抄).....	376
研究班組織.....	377
分担研究施設一覧.....	379

序

昭和56年度より新しく「筋ジストロフィー症の療護に関する総合的研究」と題して募集を行い、今後3年間継続する事になった。

そもそも本研究は、昭和39年国立療養所に筋ジストロフィー症の病棟を設置してより、昭和44年に厚生省特別研究費による臨床社会学的研究として採用され、更に昭和46年以降は心身障害研究補助金による、「進行性筋ジストロフィー症の成因と治療に関する臨床的研究」(山田班)の中で行なわれ、多くの成果が報告された事は御承知の通りである。昭和53年度は厚生省神経疾患研究委託費により研究班が発足し、国立療養所松江病院中島敏夫院長が班長となり、続いて昭和55年3月より不肖私が班長となり、研究を推進して参った次第である。

本研究班は、最も臨床的に必要な心理、看護器械・器具開発、栄養部門等に分け、各セッションにて生きた学問として医師、パラメディカルスタッフ一丸となって研究を進め、その成果は非常に大きなものがあり、今後益々期待し得るものとする。

昭和56年度の成果報告書を刊行するにあたり、各班員並びに各共同研究者の御努力と厚生省当局、国立武蔵療養所神経センター、日本筋ジストロフィー協会の御指導と御協力に対して心より敬意と感謝の意を表する次第である。

また、この間に夭折された貴い生命に対して心からの哀悼の誠を捧げます。

班 長 井 上 満

心理障害・生活指導の研究のまとめ

篠田 実

本プロジェクトの目的は、デュシエンヌ型を中心とする筋ジストロフィー症にみられる知能障害や、その他の心理障害の発現機構を解明し、それにより生活指導の理論的裏付けを試み、更に近い将来に目指すべき社会復帰の条件を模索するにある。

従って医学的手法を中心としてあらゆる学術的手法をあわせ用い、心理障害の機構の解明につとめるとともに、具体的には個々の生活指導の事例、現在まで経験した社会復帰のケースを分析することにより、より望ましい形の復帰の体系を求めたい。

本年度の研究の主なテーマとして

- 1) 心理障害発現機序の解析
- 2) 成人患者の生活指導（社会復帰の問題も含めて）
- 3) 先天性筋ジストロフィー症の療育の問題
- 4) その他

が挙げられ、1)及び2)のテーマについて先づ全国的調査を基礎とする研究が企図された。

以下、研究の成果を述べると

テーマ1)については、デュシエンヌ型筋ジストロフィー症において、言語性IQが動作性IQに比べ低下しているといわれているがその理由の解明のため、従来よりイリノイ言語学習能力診断テスト（ITPA）が行われてきたが、そのテストを全国的規模にひろげ、吉良（西別府）を中心にまとめられた。その結果、言語学習年齢が暦年齢より1～2才低いこと、文の構成テストでは2つのグループに分けられることが知られた。

即ちITPAの下位テストをしてみると、正常に比べや、低めのところで1つのグループを形成しているが、文の構成のみ2つのグループをなしている。評価点の高いグループと低いグループである。更に分析すると高いグループでは言語学習年齢が暦年齢に比べ1才程度劣っているが、低いグループでは2～4才程度低い。又、高いグループでは全体としてそのプロフィールの評価点は低目だとしてもまとまっているが、低いグループでは個人内差が目立ち、個人内差の甚だしいものの集まりであるといえる。

視知覚の発達についても全国的に西村（南九州）を中心に検討されたが、視知覚の発達は図形と素地以外の領域で遅滞を示す、形の恒常性、空間位置についての落込みがみられ、年齢とともにその差が拡大する。WISCによるIQと知覚指数とは相関がある等の結果が得られた。

個別的な研究の主なものでは、松下（下志津）は感覚統合の問題を取上げ、脳幹部での統合障害に注目すべきとしている。小笠原（鈴鹿）は同胞間のIQの検討を行い、少い対象だが同胞間のIQに高い相関が認められ、更に検討を要することを示唆している。福山型の先天性筋ジストロフィー症でも知能の縦断的な追跡が行われ、IQの恒常性を向上しつつあることが認められた。（黒田、松江）

生活指導の面では全国的に成人化の問題が取り上げられ、特にデュシエンヌ型以外の症例を中心に社会

復帰の問題が白神（刀根山）、中島（赤坂）、鈴木ら（松江）によって取り上げられ、いずれも生産活動（印刷、レザー製品、印章等）に従事し、一定の収入を得るまでに活動している例さえみとめられた。今後、デュシエンス型を含めて、可能な限り社会復帰の条件を模索し、新たな体系を作り上げねばなるまい。

これらの前提として成人化、若しくは成人患者に対する生活指導の問題がある。

先づ全国的調査として、堀田ら（川棚）を中心として入院生活における諸問題の把握のためアンケートのまとめが示された。それによると、個人的問題、職員とのかかわりに関する問題、充実した生活を送るための条件、地域社会とのかかわりをどうするかというような事柄を問題として取上げ、解決すべきことが示された。又、工藤ら（岩木）は全国の成人患者に対し、処遇面に対する意識の実態を調査し、その結果、機能の低下に伴い機器の自動化が望まれ、精神的問題として人間関係を円滑にし、地域に対しては社会資源の十分な活用の必要性を力説している。関連せる研究として関谷ら（下志津）、飯村ら（長良）、小笠原ら（鈴鹿）、野尻ら（鈴鹿）、中野ら（川棚）、荒井ら（兵庫中央）等がそれぞれの角度から、意識、社会性の問題を検討している。

先天性筋ジストロフィー症について療育の問題が取り上げられているが（八雲、沖縄、川棚）今後更に多くの問題を広く取り上げる必要があると思われる。

感覚統合に関する研究(PMD児の聴性脳幹反応)

国立療養所下志津病院

山形 恵子

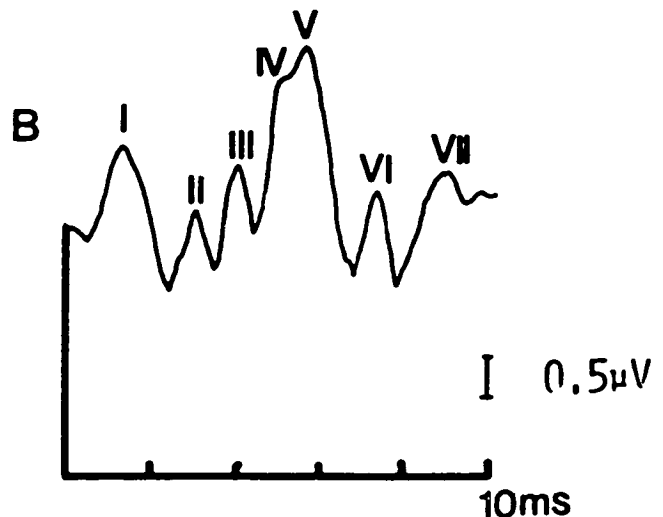
松下

登

聴性脳幹反応(Auditory Brain Stem Response ; ABR, Brain Stem Response ; BSR)は1970年にJewett, Sohmerらによって、脳幹聴覚路に由来する電位活動として、頭皮上で記録されて以来広く臨床的に用いられてきている。

正常聴力者の聴性脳幹反応を図1に示す。これはクリック音刺激(70dB)を与え、頭頂一耳垂誘動で、2,048回平均加算し、音刺激を与えた時点から10msecまで示したものである。10msec

図1



以内に7相性のピークが認められ、Jewettらは速く出現する方のピークから、I波、II波、III波……VII波と命名した。

I波～V波の起源については、ネコによる破壊実験と切断実験、及び、ヒトの剖検所見にもとづくもので、Bachwaldらによれば

I波は同側の聴神経

II波は同側の蝸牛神経核

III波は反対側の上オリブ核

IV波は両側の外側毛帯核

V波は反対側の下丘

と説明しているが、単純な1対1の関係は成立せず、複数の神経核の複合反応と一般的に考えられている。

刺激音圧を変えると反応波形は変化する。V波が最も安定して記録され、振巾も通常最も大きく出現する。続いて、I波、III波の順に出現性が低くなる。又、IV波はV波と完全に分離せずに複合波となる事が多い。

今回我々は、米国テレダイン社製の聴性脳幹反応測定装置を用い、PMD児に応用を試みた。

〔目的〕

PMD児の知覚機能の解明の為、末梢聴覚伝導速度を測定する。

〔方法〕

米国テレダイン社製の聴性脳幹反応測定装置を用い、1秒間に20回のクリック音刺激を1,000回～1,500回の加算にて、電位的波形として記録した。尚、測定に際して、被検者はすべて自然睡眠の状態で行われている。

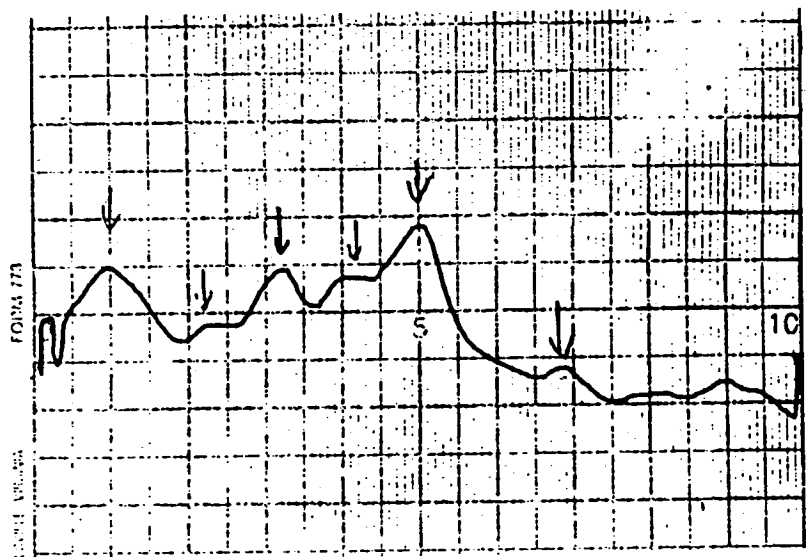
〔結果・考察〕

21才のD型PMD男児の結果を図2に示す。

2 KHz、80dBのクリック音刺激にて、V波の潜時を測定すると、5 msecとなる。本装置の正常データではV波の潜時が5.2msec～5.3 msecである為、本例に於いては、やや潜時が短い傾向にある。

図3は、10才のD型PMD男児の結果である。前例同様、2 KHz、80

図2



dBのクリック音刺激では、V波の潜時は4.8 msecであった。

更に全体で5例のD型PMD児に関して検討した結果、V波の潜時は全例正常あるいは若干短い傾向を示した。又、左右差は特に認められなかった。

過去の本班会議での報告では、PMD児のIQに関し、言語性IQの低下が動作性IQに比して明らかに低く、かつ、

我々が昨年の本班会議にて報告したITPAの結果に於いては、Inputの問題よりもむしろOutputの問題が多く認められている。これらの神経心理学的検査に加え、PMD児の知覚機能解明の為に聴性脳幹反応を施行した結果は、末梢聴覚伝導路（内耳より中脳の下丘まで）の器質的な問題は認められない。これより上位の認知レベルは、ABRの適応外である。又、本検査を応用して、脳幹部障害の診断を試みている報告も、本邦にてここ数年急速に増えつつある。今後症例数を増して検討する必要がある。

〔参考・引用文献〕

- 1) 吉江信夫、小出富士夫；聴性電気反応診断・検査法の基礎と臨床、日本聴電図研究会誌Vol 2、No 1、1981
- 2) 河野慶三他；Duchenne型進行性筋ジストロフィーの知能、厚生省心身障害研究、進行性筋ジストロフィー症の成因と治療に関する臨床的研究、昭和50年度研究成果報告書
- 3) 松下 登他；PMD児の感覚統合に関する研究、厚生省神経疾患研究、筋ジストロフィー症の療護に関する臨床社会学的研究、昭和55年度研究成果報告書

PMD児の感覚統合に関する研究(回転後眼振検査)

国立療養所下志津病院

山形 恵子 松下 登

子供の発達・学習は、その成熟過程に於いて環境からの刺激との対応によってなされる、と考えられる。

図3

